

東日本大震災からまもなく3年、 気になる原発再稼働の動き！

3月7日の毎日新聞記事によると、原発再稼働に向けた準備が着々と進んでいるという。政府は「安全性が最優先」と慎重な姿勢をアピールする一方で、「貿易赤字が拡大」「電気料金が上昇」などと原発停止の弊害を列挙し、早期再稼働の必要性を訴えている。東京電力福島第一原発の事故から3年が経過しようとする中、「日本経済のため、万が一のリスクには目をつむろう」との安易な容認に発展しかねない空気に危険を感じると主張している。

新規制基準は無事故を保証しない！

政府は原子力規制委員会の新規制基準を「世界最高水準の厳しさ」と強調し、規制委の審査をクリアすれば安全を確保できるかのような説明をしています。事実、政府原案では原発の安全性の判断は規制委に委ね、新規制基準に適合していたら再稼働を進める、となっているのです。しかし、規制委自ら「基準さえ満たせば原発が安全であるという誤解を生む」とクギを刺すように、新基準は事故ゼロを保証するものではありません。

斑目・元原子力安全委員長「規制委に専門家はいない」

原子力安全委員会の委員長だった斑目春樹氏は、3月7日、産経新聞のインタビューで、事故の教訓が活かされていないと指摘し、「原子力規制委員会には原子力安全の専門家がいらない」と言及、規制委の閉鎖性を問題視した。その一部を紹介する。

現在の規制の仕組みをどう見ているか

私は今の原子力規制委員会よりも事故の経験があるが、話しを聞かれたことはない。大学に属する原子力安全の研究者は電力会社と協力しなければ『現場』はない。それを『御用学者』とレッテルを貼り排除したため、規制委に原子力安全の専門家が不在だ。関係の学会を巻き込み透明性を確保しつつ、オールジャパンの規制体制づくりが必要だ。

事故の反省は活かされている

たとえば、緊急事態応急対策拠点施設（オフサイトセンター）は相変わらず原発の近くにある。今事故が起こったとして、対応出来るとは思えない。

福島事故の教訓はどこへ行ったのか？

福島事故の教訓とは一体、何だったのでしょか？ 政府や電力会社が作り上げた安全神話と決別し、事故の危険性から目をそらさない謙虚な姿勢だったはず。決してゼロにならない危険を「想定外」と切り捨てるなし崩し的な再稼働を認めるわけにはいきません。

原発に安全はなかったのです。それを悲劇的に証明したのが福島事故でした。今こそ、なし崩し的な原発の再稼働に、NO！の声を上げようではありませんか。